

# 漁業は素敵な職業

## － 漁業後継者の取組み －

内之浦漁協 岸良支所 立本 順也

### 1 地域の概要

肝付町は本土最南端の大隅半島の南東部に位置し、平成17年7月に内之浦町と高山町が合併してできた町である。

国見山系の豊かな森林、肝属平野の肥沃な大地、志布志湾や内之浦湾を含む太平洋を望む美しい海岸線など豊かな自然に恵まれ、温暖多雨な気候と相まって農林水産業が盛んである。

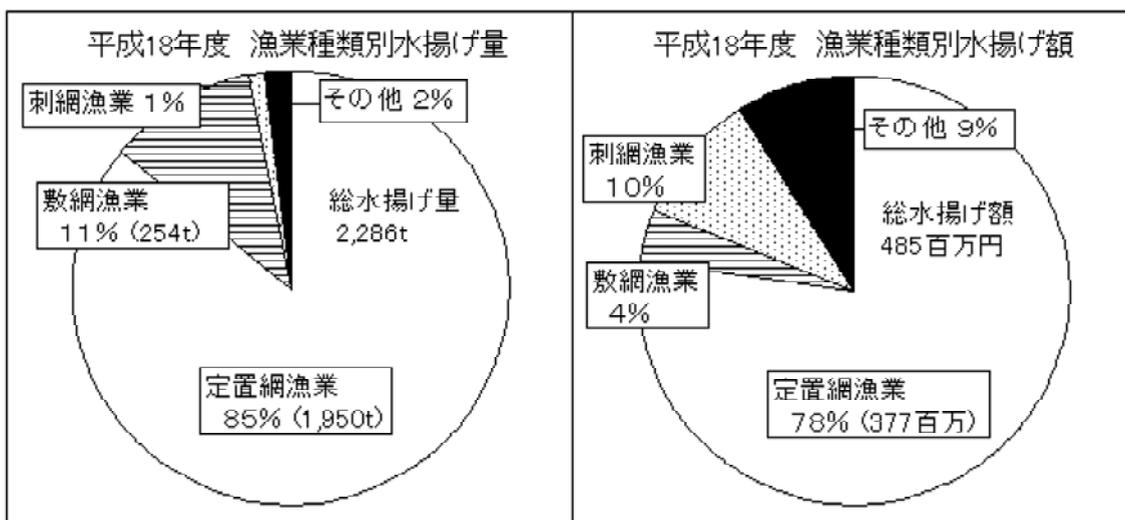
また、種子島とともにロケット発射基地がある町としても名が知られている。



### 2 漁業の概要

私たちの内之浦漁協は平成17年4月に旧内之浦町漁協、船間漁協、岸良漁協が合併してできた漁協である。平成18年度末現在、正組合員184名、准組合員34名、合計218名。

まき網を除く沿岸漁業の取扱高は 2,286トン、485百万円である。まき網漁業、定置網漁業、刺し網漁業、棒受け網漁業、底曳き網漁業、魚類養殖業などが営まれ、まき網を除く沿岸漁業の水揚げ数量の88%、金額の78%を定置網漁業が占め、地区ごとに特色ある様々な漁業が営まれているのが特徴である。



### 3 就業までの経緯

県立有明高校を昭和63年に卒業した私は、漁業に従事するつもりだった。父が漁業を営んでいることもあり、漁業に従事するのは、当然のこととと思っていたので、父も賛成してくれると思っていた。

しかし、予想に反し父は、「年取ってから、都会に憧れて悔やむな。若い今のうちに世間を勉強してこい」と反対され、自衛隊に就職した。自衛隊は、公務員なので安定しているが、時間に追われる規律正しい日常や転勤生活にはなじめず、また故郷で海の仕事へのあこがれを捨てることができなかつたので、自衛隊の引き留めや両親の大反対を押し切って、平成9年3月、27歳の時にUターンした。

地元に戻って父から開口一番、「安定した生活を捨ててオマエはバカだ。バカに漁業はできないぞ。それに、船舶操縦士の免許がおまえに取れるものか!」と言われた。私は、地元に戻り、漁業を営むつもりだったので、有給休暇とボーナスを使って船舶操縦士1級の免許を取得していた。すぐに免許を見せてもよかつたのだが、父から「免許がおまえに取れるものか」と言われたので、私もムキになって「もし船舶の免許が取れたらどうする」と言うと、売り言葉に買い言葉、父は「免許を取ったら、船を買ってやる」と言った。これはしめた!とあって「ホントだな」と念押ししてから、どうだと言わんばかりに、免許を見せた。その時の、父の驚いた顔といたら。

父は、私が考えもなく帰ってきたとあっては、計画的に船舶と潜水士の免許を取得し、漁業に従事する覚悟があると認めてくれてからは、力になってくれた。そして、自分ではまだ早いかなとも思ったが、周りの勧めもあり、水産改良普及員の方々に相談しながら、平成10年、就業して2年目の29歳の時、沿岸漁業改善資金の青年漁業者育成資金を活用して、新船「第三 啓千丸」6.6トンを建造した。船が大型になり、大きな期待と少しの不安を抱えながら新たな生活がスタートした。

### 4 操業の経緯と現状

当初、父の経営する小型定置網漁業に従事しようかと思つたが、大型の方が勉強になることと、家族と一緒に甘えがでると思つたので、親戚の経営する大型定置網漁業に就業した。

学生の頃から定置網漁業のアルバイトをしていたので、漁業に抵抗はなく、また天候や漁模様等、様々な要因に左右される漁業の厳しさをわかっているつもりだった。加えて、定置網漁業は、毎朝、決まった時間に網をあげ、漁獲物を選別して市場に出荷、と1日のサイクルが決まっていると思っていた。しかし、実際に就業してみると想像以上に漁業は厳しいものであった。

就職した大型定置網は、潮の流れの強い漁場に敷設されているため、大潮や潮の流れの早い時間に、網をあげることができず、潮が止まるのにあわせなければならなかつた。そのため、網上げする時間は潮の時間に左右され、深夜1時から網上げすることも多々あったので、内之浦の定置網の中で一番きつい職場として知られ、従業員は長続きせず、いつも人手不足であった。人手不足の上、潮の流れが強いので、網上げするときも網は重く重労働であった。加えて、潮に浮きが流され船底に引っかかることがあり、そのときは、従業員の中で一番若い私が、潜水してトラブルに対処しなければならなかつた。

つらいことも多かったが、網の扱いや修理、手入れの方法などを学ぶことができたことや、潮の流れがあり大潮の時は網が流され漁獲は少なかったが、小潮の時は大漁であり、網をあげたあとの喜びは格別であった。

定置網は、7月から10月までの4ヶ月間は、台風対策のため網を撤去するので、この期間に操業できる漁法を導入することが、漁業経営を独立するために不可欠であった。そこで、定置網漁業に従事する傍ら、イセエビ建網や一本釣りなどの指導を、父親から受けた。

建網は、夕方に仕掛け、定置網の仕事が終わってから取り上げるので、組合せ漁業には最適であったが、主力のイセエビ建網は、夏期は禁漁期であるため操業できないので、定置網の休漁期と重なってしまう欠点があった。また、冬期12月から2月頃までは、時化のため網が破損したり流されるので、網を投入できなかった。

夏期にどうやって収入を得るか?と考えたとき、岸良や船間は、瀬渡しを中心とした遊漁船業が盛んで、土日祝日を問わず多くの釣り人で賑わっているので、父や仲間の漁業者も営んでいる遊漁船業を考えた。イセエビ建網は、磯付近に入れられるので、この期間、磯釣りを行うことができず、瀬渡しとイセエビ建網は、操業期間を補完しているの、この点では適している。

しかし、遊漁船業は、自分で釣りをするのと異なり、お客さんに釣って満足してもらうことが大切なので、技術よりも漁場の知識が必要である。また、事故が起こらないよう、常時、見回りを行わなければならないので、時間が不規則な大型定置に従事しながら営むことが難しいため断念した。また当時は、棒受網漁業の漁模様が良かったので、遊漁船業ではなく、棒受網漁業を行うことを計画した。そのため私の漁船は、トイレや客室といった遊漁船業を営むのに必要な設備はなく、デッキを広くとった、棒受網漁業を営むに適した船形をしている。

着業当初は、定置網と建網を主体に、棒受網漁業を営む、経営形態であったが、最近の魚価安のため、経費がかさみ、逆に経営を圧迫するようになったので、棒受網からすくい網へ転換し、あわせて遊漁船業を営むようになっている。

年間操業スケジュール

種類	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
定置網		■	■	■	■	■	■					■	■
イセエビ建網				■	■	■			■	■	■	■	
遊漁船		■	■			■	■	■	■				■
一本釣り		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
素潜り(ササエ)		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	
潜水器(トカリ)						■	■	■					
底曳き網(貝)							■	■	■				
すくい網							■	■					

現在、私は、大型定置が従業員不足で休業したのにもない、父の経営する小型定置網に従事している。以前従事していた大型定置と異なり、早朝から網揚げし、午前中に終わることが多く、家族の協力も得られるので、時間に融通が利き季節にあった操業が行うことができるようになった。イセエビ建網は、春先の3～4月、解禁後の8～11月に操業し、操業できない期間は遊漁船業を営んでいる。

定置の操業後や、空いた時間には、一本釣り漁業を周年営んでいる。私は、主に瀬付きのタイ類、水イカのほか、黒潮を回遊するシビ、カツオを対象に、周年一本釣り漁業を操業している。一本釣り漁業は、定置網や建網等の合間の時間に操業できることや、経費が安く導入しやすい利点がある。しかし、海底の状況や潮の流れを読む必要があり、一番経験を要する漁法でもある。

その他に、小型底曳き網漁業、潜水器漁業、すくい網漁業も営んでいるが、大きな収入とはなっていない。

小型底曳き網漁業は、共同漁業権内の貝桁網（手繰り第3種）で、資源量が限られているため、夏季に2回程度しか操業できないよう組合で規制している。すくい網は、魚価安のため経費をまかなうことができないので、6～7月頃数回操業するのみである。

潜水器漁業は、簡易潜水器を使用したトサカノリと、素潜りによるサザエの採捕であるが、最近資源量が減少し、水揚げは年々減少している。

私の漁業収入の状況は、定置が約6割、イセエビ建網約2割、遊漁船業約1割、一本釣りとその他1割となっている。

## 5 今後の課題と展望

最近の漁業は、漁獲量は減少傾向にあることに加え、原油が高騰しているのかかわらず魚価は安く、経営を二重、三重に圧迫し、非常に厳しい状況にある。

また、私が係留している船間漁港は、切り立った岩礁地帯に作られているので、水深が浅く、出入港時間は、満ち潮を待たなければならない。そのため、早めに出港し、沖で係留しながら、船内で夜を明かすことや、帰港の際は、沖で潮が満ちるまで待たなければならない。そのため、1日の平均操業時間は、大きな制約を受けている。

そのため、どの漁協も抱える悩みだとは思いますが、私の岸良地区も、漁業への新規参入者がなく、高齢化が進み、組合員が減少しており、49名の組合員に対し、40歳以下の組合員は、私を含め4名しかいない状況である。

漁業を取り巻く環境は厳しいものがあるが、これからの展望を考えると



### (1) 後継者育成

私もいずれ父親から経営を引き継ぎ、小型定置網から大型定置網への転換を希望しているところである。現在の位置は、海底に引っかかって網が揚がらなくなり、網を

傷つけることも多いので、現在の位置よりも、多少岸寄りに移動し、網の海底が砂質で網のすわりの良い位置にしたい。水深の関係で大型となるが、規模は変わらず、現在のままである。

漁があっても、時間が不規則だったり、潮流の関係で網上げ作業が重労働になればなかなか従業員が集まらないが、操業が容易になれば、就業希望者も増えると思うので、経営が安定すればと思っている。

県の漁師塾を受講した方が、内之浦本所の定置網漁業に新たに就業した事例があるので、私がもしも経営者になったら、同様に受け入れたいと考えている。地域に若い漁業者が増えれば、地域も活性化していくのではないだろうか。

## (2) ブルー・ツーリズムへの展望

現在は、地元の漁業者が、それぞれが遊漁船業を営んでいるが、地理的特性を生かし、観光漁業を推進し、地域の振興が図れないか、模索しているところである。

地元で食事する場所がほとんどないので、釣り客の弁当や食事に困っている現状もある。漁協女性部においては、品評会で賞を受ける良い加工品があっても売る場所がない。これらを解決するひとつの方法として、何か店舗ができれば、加工品の販売や食事する場ができる。地元で核となる施設ができれば、体験漁業や船釣り・瀬渡しを中心とした観光漁業によるブルー・ツーリズムへ発展できないかと思っている。

## (3) 資源管理の取組み

内之浦のえっがね（イセエビ）は、地元を代表する魚種であり、春先と解禁後の秋には、「えっがね祭り」が催され、名をはせている。「えっがね祭り」は、漁協ではなく、地元の観光協会が主催となって、地域の活性化と、地元消費を伸ばす取組みである。鹿児島まで出荷する必要はなく、漁業者のメリットも大きいので、イセエビが品切れにならないよう確保に努めている。

地先の資源は、地域の宝であり、私自身、地先の資源に支えられてきた。その大切な資源を次の世代へ、後継者のために資源を維持していく必要がある。漁協全体として、イセエビの資源管理を考える時期に来ており、昨年の総会で、イセエビの資源管理規定が定められた。地区ごとに禁漁区域を設定し、網目と網丈の制限と抱卵エビの採捕禁止など、イセエビの資源管理は始まったばかりである。その成果がでるのはこれからであるが、継続的に安定して漁獲が得られればと、願っている。

## 6 最後に

漁業を取り巻く環境は厳しいものがあるが、漁業は自分の努力や工夫が、ダイレクトに反映され、やりがいのある素敵な職業だと思う。

今まで、私が先輩達から、いろいろお世話になってきたが、これからは、私が地域に恩返しをしたい。そのためにも、私たち若い漁業者が意欲的な操業をし、ゆとりある漁業経営をしていきたい。今後も大好きな海で仕事ができる喜びを感じながら漁業を続けていこうと思う。